
天使の香り

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の香り

【Nコード】

N4091C

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

難病に侵された少女の前に現れた青い瞳の少年ククル。少女との交流の中、彼女の直向さと笑顔にククルの心は癒されてゆく。しかし、ククルが少女の前に現れた理由は……
危篤きとくに陥った少女を前に、ククルが取った行動とは？

1ノ香（前書き）

このお話は、だいぶ前に完結済の「バナラ」という小説に挿入されていた童話を抜き出して、若干の修正を加えたものです。かなり古典的なストーリーですが……

1ノ香

天使は誰もがなりえる権利を持っている。

天使は救った人間の苦悩、苦痛を一生背負わなければならない。

そして、多くの天使たちはその苦痛に耐え切れず、無の世界へと自分の存在を消し去る。

天使は善意が作り出す幻影と人は言う。

しかし、誰かを救いたいと言う強い気持ちがこの世に芽生える限り、天使は存在するのだ。

穂のかに甘い香りと共に。

* * *

その昔、天使と悪魔は平等に認められた存在だった。

生をつかさどる天使。

死をつかさどる悪魔。

そして、死者の魂を運ぶ死神もまた、天界に認められた存在だった。

青い空にぽつかりと浮かぶ雲がいくつも連なって、風に吹かれてゆつくりと流れていた。

レンガ造りの建物が並ぶ小さな町の周辺には、瑞々《みずみず》しい緑の葉に覆われたブドウ畑が広がっていた。

そのブドウ畑の向こうには小高い丘がある。

丘の周辺には小さな森が幾つもあるが、それらは丘を越えた深い森に続いていた。

町から一番遠い丘のふもとに、少女は住んでいた。

少女の身体は重い難病に侵おかされていた。

その昔、その時代の医学では原因が特定できず、治療は不可能だった。

全身の筋肉が麻痺まひして感覚を失い、最後は心臓の筋肉もその機能を失い止まってしまうのだ。

彼女は最初に右腕の感覚を失った。

残った左腕で文字を書き、食事をした。

彼女は絵を描くのが好きだった。

病気になる前は、町の展覧会で入賞した事もあった。

左手ではどうにも上手く描けなかったが、それでも少女は絵を描き続けた。

その次に少女は左足の自由を失った。

それでも彼女は、右足だけで歩き回り、共働きの両親には負担をかけまいと家事の手伝いまでしていた。

両親は娘の病気を何とか治そうと、懸命に働いた。

医者に見てもらっただけでも大変なお金がかかるのだ。

町じゅうの医者に見てもらった少女は、隣の大きな町の大きな病院にも通ったが、結局治療法は解らなかった。

少女は時間があると、毎日絵を描いた。
それが彼女の唯一の気分転換でもあったのだ。

家の近くの小さな森の入り口で絵を描いていたある日、その少年は少女に声を掛けて来た。

「なんだこれ、へったくそな絵だな」

隣の家までは100メートルはある。そのまた隣まで100メートル。

町外れにある家々はそんな感じだったから、近くに住む親しい子供はいなかった。

「あなた、誰？」

少女は警戒する事も無く、その見知らぬ少年に訊いた。

「僕はククルって言うんだ」

「ククル？ 変った名前ね。あたしはアンジェリカ。みんなはアンジェって呼ぶわ」

少女は屈託の無い笑顔で少年を見つめた。

「あなたって、バニラの香りがするのね」

「そうかい？」

「うん。すごくいい匂い」

「それは、光栄だね」

少年はキラキラと輝く、涼しげな青い目をしていた。

木立から注ぐ木漏れ日が、瞳の中に吸い込まれていくようだった。
「アンジェは絵が好きなのかい？」

「うん」

「その割には、へただな」

少年の透き通るような金色の髪がサラサラと風でそよいでいた。

「あたし、本当は右利きなの。でも、もう右手は動かないの」

「へえ、それで左手で描いてるのか」

少年は手を腰に当てて、首を傾げながら

「まあ、それなりに味のある絵だよな。うん」

「ありがとう」

アンジェの笑顔はククルの心に暖かい火を灯すような、そんな笑顔だった。

アンジェリカは学校に行っていなかった。もちろん、健康な頃とはみんなと同じように学校へ通い、友達と遊んだ。

しかし、病気の症状が出ると、学校側から「来られると困る」

そう、言われたのだった。

足手まといという事もあるが、原因不明の病気が他の生徒にうつるのではないかと思われたのだ。

身体の不自由になった彼女にとって、まだまだ偏見の多い時代だった。

次の日、アンジェリカが何時もの森の入り口まで来ると、ククルが立っていた。

「キミは、足も悪いのかい？」

少女はピョンピョンと杖をつきながら、右足だけで歩いて来たのだ。

「うん。左足も動かないの」

「それは、大変だね」

少年は木にもたれて、少女がイーゼルにキャンバスを立てかける様子を眺めていた。

「ククルは何処から来るの？」

「僕は、この森のずっと奥に住んでるんだ」

「この森に人が住んでるなんて知らなかった」

「僕の家周りにはバニラの花が咲いていて、それを乾燥させて食べるんだ」

「バニラの花を食べるの？」

アンジェは大きく瞬きをしながら言った。

「ああ、けっこう旨いよ」

ククルの瞳は、澄んだ青空を映し出しているようだった。

「だから、ククルはバニラの匂いがするのね」

アンジェはそう言って笑った。

「ククルは、この森の奥で一人で暮らしてるの？」

「いや、母親と一緒にさ」

「やさしい？」

「いや、鬼だね」

ククルは笑って言った。そして、アンジェもつられるように声を
出して笑った。

2ノ香

日が西へ傾く前に、いつもアンジェは家に帰る。

「まだ、いいだろ。日暮れまで、まだ時間はあるよ」

ククルが名残惜しなごりおそうに言った。

「夕飯の支度をしないといけないの」

「お母さんは夕飯の支度をしてくれないの？」

少女は小さく首を横に振って

「お父さんも、お母さんも働いているし、あたしの病気にお金も掛かるから、少しでも家の手伝いをしたいの」

「病氣びやうきって、お金が掛かるのかい？」

「お医者に見てもらうには、お金がかかるわ」

ククルは家に帰るアンジェの後ろ姿を、何時も寂しそうに見送った。

彼女は途中で何度か振り返り、笑顔で小さく手を振った。

彼女は助けを求めなかった。

ククルは何時も見ているだけ。

一度、アンジェが画材道具を持ったまま、転んだ事があった。

さすがのククルも

「大丈夫かい？ 手を貸そうか？」

そう言って彼女に駆け寄ったが

「いいわ、自分の事は自分でしたいから」

そう言って、アンジェは笑いながら、這はいずるように片腕と片足で立ち上がった。

小さな森の入り口で、ククルとアンジェは毎日会い、会話を楽しんだ。

ククルの青い瞳は、アンジェの心に瑞々しい潤いを与え、アンジ

エの笑顔はククルに心の温かさを与えた。
しかし、一週間が過ぎた頃、何時もの場所にアンジェの姿は無かった。

大きな満月が、森の木々や町並みを照らしていた。
「ここにいたんだね」

町にある小さな病院の小さな病室の入り口に、ククルが立っていた。

アンジェはベッドから起き上がって

「ごめんなさい。朝起きたら、右足が動かなかったの」

そう言つて、小さく微笑んだ。

窓から入る月明かりに、ククルの金色の髪は白く光っていた。

「右足が？」

アンジェは小さく肯いて

「そのうち左腕も動かなくなる。そして、全身が動かなくなつて、最後は心臓も動かなくなるのよ」

「死ぬ……て事？」

アンジェは黙つて小さく肯いた。

「でも、また会えるよね？」

「死んだら、もう会えないわ」

「二度と？」

「そうね、二度と会えないわ」

ククルは悲しい目をして口を噤つぐんだまま、何も言わずに病室を飛び出していった。

アンジェは、夜空に輝くシルバーイエローの満月を静かに見上げた。

小さな森を抜けると、その先には深い森が何処までも広がっていた。

そこはキコリすら入り込まない人間界とは離れた世界。深々と木々の生い茂る精霊の棲む緑の世界。

ククルの家は、そんな場所に在る。

「母さん、彼女に会いに行けって……彼女の命を取る事だったんだね」

ククルは家に帰ると、息を切って母親に尋ねた。

「そうだよ。お前の初仕事さ」

「どうして？ 彼女はいい娘だよ」

「死ぬ人間に、良いも悪いもないんだよ。あたしら死神は、死んだ人間の魂をあの世界に届けるだけさ。死に関与できるのは、それを導く悪魔と、それを救う天使だけなんだよ」

母親は涼しげな笑みを浮かべて言った。

「僕は嫌だ。アンジエはもつと生きるべきだ。死んでもいい奴なんて他にいくらでもあるじゃないか」

ククルは初めて母親に反抗した。

「あたしら死神には、そんな事は関係ないんだよ。それともお前、一生人々を苦しみから救う天使にでもなりたいのかい」

ククルは息を呑み込んだ。

母親は続けた。

「天使なんかになったら、自分の寿命が尽きる何百年もの間、助けた人間の苦しみを背負い続けるんだよ」

母親はククルの頭を優しく撫でながら

「お前、そうなくてもいいのかい？」

「でも、その苦しみに耐えれば、神様の側で働けるって……」

ククルは呟くように言った。

「バカだね。何百人の天使がそうやって消えると思うんだい？ あそこで働けるのは千人に一人さ。他の天使は、人間の苦しみを背負う事に耐え切れず、途中で無の世界に消えて行くんだよ」

ククルの額から冷たい汗が流れていた。

3ノ香

満月は欠け、弓張りの半月に姿を変えていた。

アンジェリカの病気の進行は早まっていた。

既に左腕も動かなくなり、ベッドに起き上がる事も出来ない。

「毎日来てくれて、ありがとう」

アンジェは横たわったまま、ククルに微笑みかけた。

「こんなに夜遅くに出歩いて平気なの？ ククルは学校に行つてないの？」

こんな時でもアンジェは他の人の心配をしてしまう。

「ああ、僕は家で勉強してるんだ」

ククルは小さく微笑んだ。

「そう」

アンジェは窓の外を眺めて

「あの月は、こんど何時満月になるのかしら」

「今、欠け出しの半月だから、それから三日月、新月、そして再び三日月から半月になって……あと二十日くらいかな」

ククルは静かに応えて

「アンジェは死ぬのが怖くないの？」

「怖いわ……でも、悲しむお父さんとお母さんの事を思うと、そっちの方がずっと辛いわ」

「自分以外の人の気持ちが辛いのか？」

アンジェは肯く代わりに、深く瞬きをした。もう頭を動かす事さえ困難なのだ。

「もう、満月は見れないかしら」

アンジェは静かにそう呟いて、少しだけ寂しい笑顔を浮かべた。彼女の微笑みに、ククルは何も応えられなかった。

近くのブドウ畑から香る風が、清々《すがすが》しく町を通り抜け、空は何処までも青く続いていた。

その日はアンジェの病室が朝から騒がしかった。

彼女は呼吸困難に陥っていた。

ついに内臓を動かす筋肉までもが動かなくなってきたのだ。

呼吸補助装置を着けていたが、人力ポンプの気休めのような装置だった。

それでもそれは、この時代には画期的な装置だった。

病室には何とか母親が駆けつけたが、父親は仕事を休む訳にはいかなかった。

例え娘が危篤だとしても……

ククルは病院の直ぐ側にそびえる高い木立の上からアンジェの病室を見ていた。

彼はもう家には帰れない。

その覚悟でここへ来ていたのだ。

………

「母さん、僕は天使になるよ」

ククルは真剣な眼差しで言った。

「お前、まだそんなことを……」

ククルの澄んだ青い目を見て、母親は途中で言葉を吞み込んだ。

その瞳があまりにも真剣で、迷いの無いものだったからだ。

「もう、ここへ戻っては来れないんだよ。それでもいいのかい？」

「どうせ、しばらくすれば、僕はここを出るんでしょ？」

「一人前の死神になつたらね。でも、一度天使になつたら、二度と私と会う事は出来ないよ」

母親はククルの、死神の子供にしては澄み切ったマリンブルーの瞳をじっと見つめると

「それでも、行くかい？」

ククルは小さく肯いて身体の向きをかえると、家のドアを開けた。
「母さん、いままでありがとう」

彼は一度も振り返ること無く、母親の視界から消えていった。

「あの子は人間に生まれるべきだったね……」

母親は小さく呟いた。

二度と会うことの無い息子、ククルの残像を見つめながら。

.....

ククルは天空に向けて両腕を高く上げ、死神としては禁断の呪文を叫んだ。

死神に生まれし者は、一度だけ天使と悪魔、どちらかの呪文を唱える権利がある。

子供の死神にだけ与えられた特権のようなものだった。

しかしそれは、今までの自分を捨てる行為。

二度と故郷へ帰る事を許されない禁断の呪文だ。

人の生き死に関わる能力を身に付けると言うことは、それだけの試練を与えられると言うことなのだ。

晴天の空から落ちた白い稲妻が、ククルの身体を貫いた。

最後ノ香

廊下では、医師が母親に今後の事を話していた。

回復の見込みは無い。もう手の施しようが無いのだ。

母親は声を押し殺して涙に咽るだけだった。

しかし、ふと病室を覗いた医師の目に奇妙な光景が飛び込んできた。

アンジェの呼吸補助をやっていた看護婦が手を止めて立ちすくんでいたのだ。

「キミ、手を止めちゃダメじゃないか。今は交代がいらないんだ。とりあえず最後まで……」

医師はそう言って病室へ入ると、看護婦の陰になっていたアンジェリカの姿を見て、思わず立ち止まった。

彼女はベッドの上で身体を起こして微笑んでいたのだ。

看護婦は困惑した表情で医師を振り返った。

医師も口を開けたまま同じような表情で、思わず看護婦を見返した。

「アンジェー！」

それに気が付いた母親は、医師を弾き飛ばさん勢いでアンジェに駆け寄って、強く抱きしめた。

「アンジェ……どうしてこんな奇跡が……」

「ククルが来たの。ククルが助けてくれたのよ」

「ククル？」

母親はアンジェの言葉に困惑した笑みを浮かべたが、流れる涙は歓喜のものだった。

「信じられん……こんな事が……いったいどうなっているんだ」

医師は、ただ呆然と立ち尽くすだけだった。

「お前は本当にそれでいいのだな。もう、取り消しは出来ないぞ」
ククルは、天上の世界から聞こえる声に黙って頷いた。
「あの少女の身体の苦しみを全て背負うのだな」
「それでも僕は死なないんですよ」
「ああ、そうだ……………だから、なおさら苦しいのさ」
天上の声が呟くように言った。

アンジエは呼吸が楽になり、身体が自由になる直前、自分の身体の中を何かが通り抜けるのを感じた。
それは、上から下にアンジエの身体を駆け抜けていった。
一瞬の出来事だった。
しかし、アンジエはそれがククルだと直ぐに判った。
バニラの香りが全身を包んで、それは暖かく、そして爽やかだった。

「ククル……………あなた、天使だったの？」
「今日から、天使さ」
ククルの声が聞こえた。
「じゃあ、昨日までは？」
「それは、ひみつさ」
「また、会える？」

「さあね、キミのそばに行っただとしても、多分もう気付かないよ」
「あたしにはきつと判るわ。ぜったい判る」
アンジエの身体に力が漲みなぎって、全身が熱くなった。
彼女はバニラの香りを大きくすいこんだ。
呼吸補助器を操っていた看護婦が、自発的に吸い込まれる息に驚

いて手を止めたのだ。

* * *

元通りの元気な身体になったアンジェリカは、再び学校へ通い無事卒業した。

やがて大人になった彼女は、学校で絵画の勉強を教える先生になった。

それから数年後、恋をして隣町に住む学校の先生と結婚し、元気な子供を3人産んだ。

「お母さん、いまケーキの匂いがしたよ」

末っ子のジョゼが庭から勢いよく駆けて来た。

アンジェは自分のエプロンで濡れた手を拭きながら

「ケーキ？」

「あれはバニラの匂いだよ」

長女のエルザが後から駆けて来て言った。8才になるしっかり者だ。

「なんで、お庭でバニラの匂いがするの？」

母親の傍にいた次女のクラエが、アンジェのエプロンを引っ張って訊いた。

「なんでかしらね」

アンジェはちよつとだけ考えるふりをして、三人の子供たちを順に見つめると

「お庭に天使がいたのかもね」

「天使？」

エルザが訊き返した。

「天使はバニラの香りがするのよ」

「どうしてバニラの香りがするの？」

「それは、きっと天使がやさしいからよ」

アンジェは子供達に微笑んだ後、庭先に出て空を見上げた。

「だから、バニラの香りがしたら、きつと近くで天使が見てるわ」

その視線の先を子供たちも見上げた。

爽やかな春の風が、穂のかにバニラの甘い香りを運んで、青い空に向って駆けて行った。

おしまい

最後ノ香（後書き）

読んでいただいた方々に感謝いたします。
ここに登場するアンジェリカの姿は、後の作品に広く反映されました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4091c/>

天使の香り

2010年10月8日15時54分発行